

長崎唐船主から長崎華商へ

松 浦 章

一 緒言

日本に在住する華僑に関する総合的な歴史研究において大きな業績を上梓されたのは内田直作博士であった。内田博士は『日本華僑社会の研究』^①において序章「留日華僑の人口と経済」^②、前編「江戸時代の華僑団体」^③、後編「明治時代以降の華僑団体」^④と日本における華僑の史的研究をされ、特に前編において明治以降において日本に在留した華僑の先駆とし、所謂鎖国時代における長崎での中国貿易、所謂長崎唐人貿易に従事した長崎来航の中国商人を華僑の先駆としてとらえられたのである。しかし、明治以降、日本の各地とりわけ横浜、神戸、函館、長崎などに在留するようになった華僑のほとんどは明治以降において日本に渡来した人々であって、江戸時代の唐人貿易の関係者と長崎華僑との関連に就いては充分究明されていない。^⑤

これに対して、蒲池典子氏は「明治初期の長崎華僑」^⑥において明治初期に長崎に居留した華僑について詳細な検討を加えられたが、その対象とされたのは明治以降の長崎の華僑であった、明治前の唐人貿易との関係に関してはほと

んど検討されていない。

ところが最近、陳東華氏が「長崎居留地の中国人社会」を発表され、唐館独占貿易の終焉と長崎の居留地に居留した中国人と明治以降の長崎における中国人社会そして幕末明治初めに長崎で活躍した中国人とその商社について長崎の清人名簿をもとに考察され、初めて長崎の唐人貿易関係の商人と長崎華商の関係を指摘された。^⑦

そこで本稿では、江戸時代における長崎の唐人貿易従事者が、明治以降において長崎華僑となった事例を中心に、長崎唐人貿易の船主が長崎華商となった人物について考察を加えたい。その第一段階として、清代において海外華人が外国で居留していた形態を日本ではそれをどのように呼称していたかを、『華夷変態』に見える記述から見てみることにする。『華夷変態』は、江戸幕府が十七世紀前半の中国における明清交替の政治的動乱期における危機感から長崎に來航する中国商人等によって伝えられた情報を収集したもので、長崎で唐通事によって翻訳され江戸幕府に報告されたものである。それらの報告の中に海外華僑の呼称や動向に関する記述が若干含まれている。それらの記述から江戸時代の日本人が海外華人・華僑をどのように認識していたかについて述べてみたい。そして、幕末の唐人貿易関係者の中から、明治以降の長崎華僑に変質していったのかを明らかにしたい。

二 日中史料に見る在外華人「住宅唐人」

今日一般に呼称される「華僑」は「中国人、より広くは中国系人で、海外に居留する人々を中国漢語で包括的に総称して「華僑」と表現する」^⑧とされ、「華商」は「海外で活躍する中国ないし中国系商人のこと」^⑨とされるが、江戸時代の日本では、これらの人々をどのように呼称していたのであろうか。その呼称の事例を『華夷変態』の記述より見てみたい。

(一)『華夷変態』に見る在外華人「住宅唐人」

①暹羅

○「延宝八年庚申（康熙十九、一六八〇）十五番暹羅船之唐人共申口」（七月十五日）に、
……只私共商売之儀は、所之暹羅人、又は住宅之唐人までに出合申候故、……^⑩
とあり、現在のタイに相当する暹羅の貿易港には暹羅の人々のみならず「住宅之唐人」とされる中国系の人々が居住していた。

②東埔寨

○「元禄四年辛未（康熙三十、一六九二）六十九番東埔寨船之唐人共申口」（六月二十五日）には、
……東埔寨國、……只出産之物とは、鹿皮、下黒砂糖、うるし、ぞうげ、すわう、びんろうじ、其外薬種類、
少々出申迄之國にて御座候得共、大分之商売とても無之所にて御座候、尤住宅之唐人共は、千人余も有之候、役
人も大方唐人共勤役之者多御座候、米穀などは成程下直に御座候。……^⑪

とあり、現在のカンボジャに当る東埔寨には「住宅之唐人」が千余名も居住していた。

③麻六甲

○「貞享四年丁卯（康熙二十六、一六八七）五十七番厦門船之唐人共申口」（四月十六日）には次のようにある。
……私共去年仕出し申候麻六甲と申所は、別て下劣成えびす國にて御座候、尤城之形も御座候得共、塵相成事共
にて御座候、人民も多は無御座候、住宅之唐人は多く居申候、所々やかたは則麻六甲人にて御座候得共、畢竟は
阿蘭陀人支配に罷成、……^⑫

○「貞享四年丁卯（康熙二十六、一六八七）百四番麻六甲船之唐人共申口」（七月十三日）にも次のようにある。

……此麻六甲にも阿蘭陀人二百人程罷居申候、小城有之、阿蘭陀人は城内に罷在候、住宅唐人も七八十人も可有御座候、其外は則じゃわ人共も少は住居仕罷在候……⁽¹³⁾

などであり、マレー半島のマラッカに当る麻六甲には「住宅之唐人」が七〇から八〇名が居住していたとしている。

④大泥 (Pasani)

○「貞享四年丁卯（康熙二十六、一六八七）百十五番大泥船之唐人共申口」（八月七日）には次のようにある。

大泥と申國、夷國之内にても下劣之國にて、四季共に暖國にて、……住宅之唐人漸四拾人余も有之候。……⁽¹⁴⁾

○「元禄三年庚午（康熙二十九、一六九〇）七十八番大泥船之唐人共申口」（六月三十二日）には次のようにある。

……大泥之儀、元は爪哇國之内にて御座候得ども、最早年久敷暹邏之属国に罷成、暹邏へ貢禮仕申候、……屋形在鎮之所、則人之集りたる所にて御座候に、漸壹貳萬人には過申間敷候、其内に住宅之唐人も数百人有之儀に御座候、大分に熱國成故、貴賤共に年中裸にて住申所にて御座候、……⁽¹⁵⁾

などであり、マレー半島のパタニに当る大泥にも数十人から数百人の「住宅之唐人」の居住が見られたようである。

⑤咬留巴

○「元禄三年庚午（康熙二十九、一六九〇）七十七番咬留巴船之唐人共申口」（七月四日）には、

……咬留巴いささかも相替義無御座候、例年之通にて御座候、阿蘭陀人不相替在鎮仕罷在支配仕候、船は所之番船共に大小貳拾艘程不絶往来仕候、住宅之唐人も数万可有御座候、総じて阿蘭陀之風義、諸事共に隱密を専に相守り、少之事にても中々唐人方へ知らせ不申義に御座候、御當地へ罷渡り候船之員数さへ隠し申候て不申聞候、出船之日期も相知れ不申候、……⁽¹⁶⁾

とあり、現在のジャカルタに当る咬留巴には「住宅之唐人」が数万も居住する賑わいを見せていたようである。

⑥台湾

○「貞享五年戊辰（康熙二十七年、一六八八）百三十四番台湾船之唐人共申口」（七月七日）には、

……台湾にて仕出し申候にて、……只今は前廉に違、住宅之唐人少く罷成申候に付、砂糖作り申者無之、砂糖別て乏御座候。……

とあるように、台湾でも「住宅之唐人」が居住していたようであるが、人数は少なかったようである。

以上のように、長崎に来航した唐船が伝えた暹羅、東埔寨、麻六甲、大泥、咬留巴、台湾には、「住宅之唐人」とされる現地人とは異なる中国系の人々が居住していたことを伝えている。ここでの「住宅之唐人」と言う表現は、長崎の唐通事が日本語表記したさいに使用したものであるが、恐らく長崎へ来航した中国船主達も同様な表現をしていたものと思われる。

それでは、この「住宅之唐人」とはどのような人々であったろうか。その具体例を「享保三年戊戌（康熙五十七、一七一八）咬留巴船之唐人共申口」から探してみたい。

私共船之儀者、咬留巴より仕出し、唐人数三十八人、外に咬留巴へ住居之唐人二十三人、并咬留巴人四人、都合六十五人乗組候て、當五月朔日彼地出帆仕候、……船頭鄭孔典儀、并乗渡り之船共に、今度初て渡海候、……さて又船頭儀は、本福建之内漳州之者にて式拾年以来、咬留巴へ住居仕候、……¹⁷

長崎でこの報告をしたのは鄭孔典である。鄭孔典は、咬留巴から中国人三十八人、咬留巴在住の中国人二三名、そして咬留巴人四名の計六五名を鄭孔典が船主の船に搭乗させ長崎に来航したのである。この船主の鄭孔典は、福建省の漳州出身であった。彼はおそらく貿易を生業として二十年以前に咬留巴へ渡り、咬留巴に居住していた。鄭孔典が咬留巴に渡ったのは康熙三十七年（元禄十一、一六九八）の頃であろう。それより以来咬留巴に居住していたと考えら

れるが、それは康熙二十三年（貞享元、一六八四）に發布された展海令以降のことであった。

（二）清代檔案に見る海外華人

このように、海外居住の華人の例は、清代になると記録に残されている例がしばしばみられる。

雍正六年（享保十三、一七二八）六月下旬から七月にかけて、厦門に帰帆した中国帆船から複数の中国人が帰国している。その時の福建総督高其倬の雍正六年八月初十日付の奏摺によれば、次の四名についての供述の一部が知られる。それを掲げると次のようである。

魏勝興船内帶回之黃龍供、係龍溪縣人、在西門内居住、年六十二歲、有妻有兩個兒子、在咬留巴十七年了、係在彼賣茶生理。

據朱猜供、年五十二歲、係龍溪縣人、在南門外居住、有妻有一子十九歲了、在咬留巴十九年了、在彼種田。

據韓聘供、年六十二歲、係龍溪縣人、在北門保居住、有妻有一子、在咬留巴住十八年了、在彼種園。

陳厚供、年六十一歲、係龍溪縣人、在二十七都長州鄉住、有妻、有一子一孫、在咬留巴住十五年了、在彼賣草等因。⁽¹⁸⁾

とある。いずれも魏勝興船で帰国した四名はもともと福建省漳州府龍溪縣に居住する人々であった。黃龍は四五歳、朱猜は三四歳、韓聘は四四歳、陳厚は四六歳の時に海外の咬留巴即ち現在のジャカルタに移住して一五年から一八年間ほど居住した後に妻子やあるいは孫まで伴って帰国したのである。彼等の海外在住に関して、高其倬は、「留住外洋各民人」⁽¹⁹⁾や「留住外國人民」、「留住外國之人」⁽²⁰⁾と記述している。

雍正六年（一七二八）九月二十五日付の浙江總督管巡撫事の李衛の奏摺には、海外在住の華人を、

葛留巴、呂宋等處、皆西南洋貨物馬頭、從前留住之漢人甚多。⁽²¹⁾

とあるように、「留住之漢人」と表記している。

乾隆十三年（寛延元、一七四八）四月二日付の閩浙総督喀爾吉善、福建巡撫潘思榘の奏摺に、

黃佔係漳州龍溪縣石尾鄉里居住、見有妻子、胞叔黃照前經任呂宋甲必丹、胞弟黃令・黃罕彼時亦在呂宋營商、今三人俱已回家、……已故黃紫繼妻鄭氏、内地所生之子、與黃令・黃罕同胞兄弟、康熙五十八年、黃紫帶往呂宋、雍正四年由廣東回家、聚妻王氏、次年復往呂宋、至今二十餘年、未回内地、伊妻王氏抱養二子……⁽²²⁾

とあるように、黃佔は福建省漳州府の龍溪縣石尾郷の人であり、叔父の黃照はやく呂宋に渡り、カピタンまでになるような人物であった。そして彼も呂宋で商人となった。黃佔は黃紫の子供で中国において生まれ、康熙五十八年（一七一九）に父黃紫と共に呂宋に渡り、その後、雍正四年（一七二六）に廣東から入国して郷里に戻り妻王氏を娶るが、翌雍正五年に単身また呂宋に渡って乾隆十二年（一七四七）まで二十余年り帰国していないことが知られている。

福建漳州の船戸陳泉が帰国に際して海難に遭遇して外国船に救助され澳門に送られ、取り調べられ記録中に見られる嘉慶十四年（文化六、一八〇九）八月の稟文によれば、

具稟人福建漳州府詔安縣人船戸陳泉、年四十六歲。稟爲卸恩再沐全恩事。泉等原籍福建、素守本分。於嘉慶六年自置雜貨由廈門搭船帶往暹羅貿易、因賬目不能清收、以致羈留久候。柰水土不合、苦染成病、不已聚室黃氏、以爲服侍之計、隨產一男、喜有無恙。迨至本年、有鄉親李康等亦聚家室、俱留于此、是以往來集商、各欲家眷願帶回籍、就懇該處地方官蒙給大船一隻、駕管而回。于七月十七日牌領金發興、驗放出口。至二十六日、不料狂風驟起、船遭破爛、……

嘉慶十四年八月 日稟⁽²³⁾

とあるように、漳州府詔安縣の船戸陳泉は三八歳の時、自前の船で厦門から出帆して暹羅に貿易に赴いたが、交易は不調で当地に留まることになった。その後健康を損なったが妻黃氏を迎え家計も良好となり息子の誕生を見た。嘉慶六年になり親族の李康も妻を迎えたことを契機に、暹羅の大官に、大船の下賜を願い出て、その船で帰国することになるが、その途上で海難に遭遇したのである。陳泉も船戸ではあったが、海商活動を停止して暹羅に八年ほど「留住」していたのである。

このような経験を持つ人々が沿海部の福建や廣東、浙江省には多かつたであろう。

しかし、清末になるとこのような海外在住の華人は華僑と呼称されるようになる。その一例として光緒三十四年(明治四一、一九〇八)二月十六日付の農工商部右侍郎の楊士琦の奏摺には、

爲考察南洋華僑商業情形恭摺具陳仰祈聖鑒事、……⁽²⁴⁾

と、華僑と明確に使用されている。その中に、

新加坡幅員甚小、農産亦稀、自英人開埠後、免税以廣招徠、由此商舶雲集、百貨匯輸、遂爲海南第一巨埠、華僑二十餘萬人、……⁽²⁵⁾

とあり、20世紀初頭のシンガポールに居住する華僑は二〇数万人に達していたとされるのである。

華僑の中には、清代以降に海外に渡航し、その後に後裔をつくりその地で生業を営み財を成したのも多かつたようであるが、移住先の地での国情によって華僑の居住形態は千差万別であろう。

それでは長崎の華僑にはどのような居住形態が見られるであろうか。次に述べてみたい。

三 唐船船主から長崎華商へ

同治九年十二月初一日（明治四年、一八七一年一月二一日）付けの奏摺である「遵議日本通商事宜片」において李鴻章は次のように記している。

順治迄嘉・道年間、常與通市、江浙設官商額船、每歲赴日本、辦銅數百萬斤、咸豐以後、粵匪距擾、此事遂廢、然蘇浙閩商民、往日本長崎島、貿遷寄居者、絡繹不絕。⁽²⁶⁾

とあるように、清朝前期より中国の貿易船が日本の長崎に赴いて日本産の銅を購入していたが、咸豐年間に太平天国の乱が起るとそれまでの貿易形態が終焉を迎えた。しかしその後は、江蘇、浙江、福建の人々が日本に赴いて貿易に従事するようになったことを端的に記している。

ここではその終焉間近な時期の中国商人の動向を述べてみたい。

上海道台であった吳煦が残した「江海関征收税鈔正款帳冊」に見える咸豐十一年（一八六〇）の記録に、

咸豐十年十一月間、據官銅局司事傅伯芬稟稱、此次金吉利、蔡吉隆兩船運回官局洋銅九萬七千兩、改由上海進口、
内有應繳浙省洋銅四萬斤。⁽²⁷⁾

とあるように、咸豐十年十一月、即ち日本の万延元年十一月までに日本から上海へ帰來した金吉利、蔡吉隆の二船が日本銅九万七千斤を持ち帰ってきたのであった。長崎の記録『割符留帳』によると、万延元年十一月に最も近く長崎より帰帆した中国船は、万延元年閏三月二十七日と七月四日に長崎通商照票である信牌を与えられた未二番船と三番船とがある。この二隻のいずれかが金吉利、蔡吉隆船であったと思われる。

さらに吳煦の記事中に、

據官銅局司事傅伯芬稟稱、総商王元珍已于上年四月間、全家在蘇殉難、局務乏人主持、抑且商力疲乏、虧累萬狀、所有在滬已繳洋銅、勢難領運赴浙呈繳。

とあるように、中国側で対日貿易を指揮した総商の王元珍等は咸豐十年（万延元年、一八六〇）四月には太平天国軍の蘇州侵攻により遭難したため清官府への日本銅納入が困難になっていた。ついで、呉煦の記録に、

況查咸豐六年分、得寶、宏豊両船運回洋銅十五萬斤、本應江・浙両省分収、彼時由金運司經手、統繳浙省。九年三月、得寶船運回洋銅十萬斤、亦系全數繳浙。十年四月、宏豊船運回洋銅二萬五千斤、亦于是年七月間、統解浙省。

とある咸豐六年（一八五六）の得寶、宏豊両船は、『割付留帳』から日本の安政三年の辰二番船、三番船のいずれかであろう。咸豐九年の得寶船は、安政五年の午一番船であり、咸豐十年の宏豊船は万延元年閏三月二十七日に長崎から帰帆した未二番船であったと考えられる。この年の入港船は無く、翌年の文久元年八月二十九日即ち咸豐十一年に長崎に入港した船が繰り上げられて申一番船となった。そして同文久元年十一月十三日入港の船が酉一番船²⁸として長崎の唐人貿易の終焉を迎えるのである。文久元年（咸豐十一年、一八六一）八月二十九日に長崎へ入港した申一番船、十一月十三日に長崎に入港した酉一番船の両船を運行させたのは長崎在留の程稼堂であった。彼は太平天国軍の江南進出によって故国に戻れず、長崎においてイギリスのジャーデイン・マセソン商会のランスフィールド船、デント商会のカライミヤ船を雇用して長崎貿易を行ったのであった。²⁹

このように、長崎唐人貿易の関係者の幾人かは故国に戻らず、あるいは帰国できずに長崎に留まっていたのである。その長崎在留者を頼って、その家族や関係者が長崎に渡来することになる。

①唐船主鈕春杉から長崎華商八閩會所總理鈕春杉へ

文久元年（咸豐十一、一八六一）四月の「當節陳志祥家族共渡來致し暫館内ニ滞留被仰付度願和解」によれば、以書付申上候者ハ、鈕氏船主鈕春杉ニて御座居被仰上被下度願候事、然者本船工社陳志祥家族共、此節唐國賊徒蜂起致し近來彌増長ニ及ひ密々安居難出來不得止事本陳志祥を慕ひ逃渡暫く慶源豐號ニ借住い致し店を得共、同所を商売場所にて種々不便之儀も有之候間、館内ニ同店居致度候陳志祥より毎ニ歎願ヲ出候ニ付、此段事願候何卒左之人数入館之儀御許容被成下候ハハ陳志祥儀者不及申上一統難有仕合事存候、此段年番通事宛迄申入候条。

年行公大人より

御奉行所へ被仰上願通御許容被成下候ハハ難有事存候

覺

一 妻彭氏 年參拾六歲

一 倅二官 同拾六歲

一 同三官 同拾參歲

一 同元珠 同八歲

文久元年西四月 鈕氏船主鈕春杉

右書付之通和解差上申候以上

李 平三 印

顥川 君平 印³⁰

とあり、鈕春杉が彼の船の下級船員の工社であつた陳志祥等家族の長崎における滞在許可を求めるために長崎奉行所へ願書を提出している。

『割符留帳』の記録の最終部に文久元年八月八日付にて長崎奉行が給牌した貿易商人として鈕春杉の名が見られる。

未貳番船主在館鈕春杉上海丙午年、壹年限之割符相渡候。割符文言前二同シ但午年定数之内、上海壹艘、積銀高九拾五貫目

右之割符午年入津可仕筈之鈕春杉、今日於御役所、就被遊御渡候、私共罷出申候

文久元年酉八月八日

穎川豊十郎 印 (以下通事略^③)

とあるように、文久元年八月八日(一八六一年九月一二日)付けにて、唐通事が立ち会ひの下に長崎奉行所で信牌を給与された鈕春杉は上海より長崎に来航するとされたものである。上海として給牌されたのは、安政四年八月晦日の巳二番船、巳三番船、万延元年閏三月二十七日の未二番船、同七月四日の未三番船と文久元年八月八日の未二番船の六隻^③に限定される給牌である。丙午年は弘化三年、道光二十六年、一八四六年に当たるが、一年一〇隻の来航数と長崎奉行が決めた定数が、天保二年(道光十一、一八三一)頃より一〇隻以下に減船していた。しかし、給牌数は定数によつていたため十数年の間に実際には定数を下回る船の来航しか見られず、実情に応じて給牌していたことによる差が生じていたのであつた。しかし、文久元年八月八日の未二番船の信牌は使用されることがなかった。

文久元年(咸豊十一、一八六一)十一月付けの長崎奉行高橋美作守和貫への上申書には、

長崎表在留罷候唐船主鈕春杉之工社陳志詳家族四人、同船主程稼堂之総代鄧増弟家族男女十一人、同船主楊少棠家族四人、同船主鈕春杉之工社陳英家族男女七人、追々亜米利加船・英吉利船にて便乞渡来仕候二付、入館之儀、船主共より願出候間、相糺候処、何れも唐國賊乱未静謐不相成二付、親族を慕ひ當港迄罷越候二て、事実進退相

究り、一方之活路を求め遙かに渡来仕り入館願立候段者、無余儀仕第に相聞え、尤當三月中申上置候唐船主鈕春杉弟嫁其外之者同様之事柄にて渡来仕候節、入館為仕候振合も有之候間、此度も承届入館為仕置候申候、依之船主共差出候願書和解四通相添、有馬帶刀申談此段申上置候以上。⁽³³⁾

とあり、太平天国の勢力拡大により上海周辺を除く江南地域がほぼ制圧されていたため、長崎貿易関係者やその家族が日本に渡来してくることになるが、その殆どが、幕末期の長崎の唐人貿易に関係し、長崎に在留していた中国船主等を頼つてであつた。

さらに、文久二年（同治元、一八六二）三月の「長崎在館支那人鈕春杉申出候書付写」によれば、

以書付申上候者は在館船有鈕春杉にて御座居被仰上被下度願候、然者唐國乱未た静謐に相成不申、何れも所々へ逃避仕候得共、安寧の土地無之不得止事、當今親族吳細弟の家族共私を慕ひ英の十番カウイシャ船へ便乞渡来仕候に付、何卒格別の思召を以、左の通暫館内に滞留の義御免被成下候様強て奉願候、尤彼地都合次第歸唐為仕度奉願候、此段年番通事衆迄申上候條、年行大人より御奉行所へ被仰上願の通御許容被成下候はは、御蔭を以安居仕候、御仁恩の程重疊奉感激候。

- 一 在館船主 鈕春杉 外家属拾人
- 一 在館船主 鈕春杉 外家属九人⁽³⁴⁾

とあり、鈕春杉の親族である吳細弟の家族が長崎へ渡来して、唐館内で居住することを長崎奉行に懇請したのである。これら長崎奉行に長崎在留を願ひ出た鈕春杉は、長崎在留者の代表者として見られる。その事例は、長崎県立図書館に所蔵される「従明治元年至同二年 外務課事務簿 支那人往復」⁽³⁵⁾には「在館公司 鈕春杉 同総管 鄭仁珍」とあり、鈕春杉と鄭仁珍と兩名の名はその後もしばしば長崎の記録に見える。

「明治三年 外務課事務簿 清國人往復」には「八閩會所総理 鈕春杉 鄭仁瑞⁽³⁶⁾」とあり、「明治七年 外務課事務簿 支那従民諸願届」には「八閩會所総理 鈕春杉⁽³⁷⁾」とある。

鈕春杉は、少なくとも文久元年（咸豊十一、一八六一）八月八日付の給牌には「在館」とあることから、長崎に駐留しており、明治元年（同治七、一八六八）を経て同七年（同治十三、一八七四）まで一四年間は長崎に在留していたことは明らかであり、しかも在留中国人の代表的な地位にいた人物であることが知られる。

とりわけ、代表者となる鈕春杉について既に船主とあるように、長崎貿易の経験者であった。彼が記録の上で長崎貿易の最初に見られるのが、弘化二年のことである。弘化二年（道光二十五、一八四五）十二月十一日に長崎に入港した中国からの貿易船はこの年の最初の来航船であったので一番に番立され已一番船となった。この已一番船の財副に鈕春杉がいた。その後、弘化三年午三番船の財副、弘化四年午七番船の財副、嘉永三年戌三番船の財副、嘉永五年の子一番船脇船主、同年の子五番船の脇船主、安政三年辰一番船の脇船主、安政四年の巳三番船の脇船主、安政六年の未一番船の脇船主であったことが知られる。その経過は表1のようになる。

鈕春杉は弘化二年（道光二十五、一八四五）より安政六年（咸豊六、一八五九）まで十五年の間に九回も長崎に來航していたことが知られる。しかし、長崎への中国商船、所謂唐船による貿易が途絶えて以降のことは、長崎の記録から鈕春杉は長崎に在留していたことが知られるのである。

「唐館新地處分書類」⁽³⁸⁾には、

辰三月 唐館公司 鈕春杉

前在留船主 程稼堂

とある。辰は戊辰年すなわち慶応四年、明治元年にあたり、中国の同治七年、西暦一八六八年のことである。鈕春杉

は、この時には唐館の代表者であつた。

「慶応四年 在館唐人男女名前帳 辰四月改」によれば鈕春杉の長崎在留の状況が知られる。

忝番 蘇州人

鈕春杉 五拾七歳

春杉倅 鈕延生 十七歳

同弟妻 鈕孫氏 三十九歳

同妹 鈕保貞 四十歳

元財副 陳舟逸 三十六歳

召使 吳德順 四十八歳

×

とあるように、慶応四年（一八六八）四月の時点で、鈕春杉は長崎の旧唐人屋敷内に居住していた。彼は五七歳であり息子の鈕延生十七歳、彼の弟の妻孫氏三九歳、彼の妹鈕保貞四十歳、そして元唐船の財副であつた陳舟逸三六歳と召使いの吳德順四八歳の計六名の世帯で長崎の唐館に居住していた。

このうち陳舟逸は既に長崎来航が確認できる人物である。彼の来航を確認してみると次のようになる。

天保十一年（道光二十、一八四〇）十二月二日に長崎に入港した子一番船の財福で船主は沈耘穀であつた。次は天保十三年（道光二十二、一八四二）十二月十七日に長崎に入港した寅三番船の財副で船主は顧子英であつた。天保十四年（道光二十三、一八四三）は十二月三日に入港した卯五番船の財副で、船主は在留船主の王雲帆であつたことから航海中は陳舟逸が乗船し指揮していたことが判る。嘉永二年（道光二十九、一八四九）正月二十三日に入港した酉一番船の脇船主となり、船主は在留船主の程稼堂であつた。嘉永二年十二月二十六日に入港した酉六番船の脇船主で、

船主は鈕心園であつた。鈕心園は鈕春杉と同姓であることから鈕春杉の一族であつたと考えられる。嘉永三年（道光三十、一八五〇）十二月二十日に入港した戌二番船は彼が船主となり脇船主に錢少虎⁽³⁹⁾がいる。陳舟逸は慶応四年（一八六八）が三六歳であるならば、天保十一年（一八四〇）には十歳であつて、その歳で財福になつていたことになる。その後の鈕春杉の長崎在留の状況を見てみたい。長崎県立図書館所蔵の「從明治元年至同二年 外務課事務簿 支那人往復⁽⁴⁰⁾」に在留中国人の關係書類が収録されているが、その代表者名を時間を追つてその名のみを列記すると

○慶応四年辰七月 前局在留船主 程稼堂

同 総 管 鄭仁瑞

○慶応四年辰九月 前在留公 司 程稼堂

○慶応四年辰十月

廣東幫 廣聯興號 唐讓臣

長發源號 林雲達

東和號 梁璽君

寧波幫 久記號 虞菁菴

成記號 張德澄

江浙幫 唐館公司 鈕春杉

大浦 福建幫 泰昌號 黃信侯

廣隆號 徐勝昌

德泰號 傅池水

裕豐號 黃汝芳

新地 福建幫 裕源號 林慨使

振豐號 李而康

裕興號 蘇福星

永豐號 黃履祥

安徽幫 商 客 汪旭初

增 廣東幫 廣裕隆號 馮錦如

○慶応四年辰十一月 在館公司 鈕春杉

○慶応四年辰十二月初六日 唐商公司 程稼堂

○慶応四年辰十二月念六日 在館総管 鄭仁瑞

○慶応四年辰十二月二十八日 総 管 鄭仁瑞

○明治二年巳正月 日 公司 鈕春杉

総管 鄭仁瑞

泰昌號 黃信侯

廣隆號 徐勝昌

德泰號 傅池水

裕豐號 黃汝芳

裕源號 郭純九

振豐號 李而康

裕興號 蘇亦舫

永豐號 黃履祥

○明治二年巳十一月

鈕春杉

八閩會所総理

鄭仁瑞

益隆號

廣隆號

協興號

振茂號

建興號

振豐號

李拱記

長源號

裕興號

仁記號

とある。慶応四年は戊辰年であり九月八日に明治元年と改元したため、改元のことを知らない在留中国人は、十月か

ら十二月まで慶応年号を使用していたようである。

「唐館新地處分書類」には在留者が自身の保護と便宜を計るため八閩會所の設立を図った申請の記録が見られる。

謹啓者、所議設立八閩會所于唐館内二十二番聖人館旧基、令欲改建修理業、已估價講定、祈稟官事、衙門頭目委員、到彼丈量基址、定徵地租、以便開工、特此上 稟

巳三月

公司 鈕春杉 印

総管 鄭仁瑞 印

とあり、八閩會所を旧唐人屋敷跡地に設立することをもとめた。この動きに廣東系の人々も追随したようで、

己巳年四月初三日 嶺南會所 潘勉敬蕭

とあり、さらに同書類には、

○巳四月 公司 鈕春杉

○巳四月 総管 鄭仁瑞

○巳四月 在館公司 鈕春杉 印

○巳五月 総管 鄭仁瑞

○巳六月十二日 程稼堂

○明治二年巳七月二十八日 八閩會所総理 鈕春杉

鄭仁瑞

とあり、特に八閩會所総理の日本語訳の和解には「八閩會所総代」と訳されている。さらに、同書類には次のようにある。

○已十一月初三日 八閩総管 鄭仁瑞

○已十一月 唐 商 程稼堂

○已十一月二十九日 八閩會館総理 鈕春杉

鄭仁瑞

以上の経過から見て、鈕春杉は明治二年七月には八閩會館総理となっていたことが知られる。さらに彼の経歴に関して詳しい記録が「明治十一年 清民人名戸籍簿⁽⁴⁾」に見られる。同簿によれば、

上等 鈕春杉 六十七歳 長洲縣 八閩會所董事 安政五年(1858)二月八日 一番

とあり、さらに続いて同じ鈕氏が三名続く。

下等 鈕樹蘭 二十六歳 長洲縣 師範 五年五月七日 一番

下等 鈕樹蘭母 孫氏 四十九歳 一番

下等 鈕樹蘭姑 鈕氏 五十歳 一番

とあり、唐館一番の鈕春杉と同住所であったことから見て鈕春杉の一族であったことは確かであろう。さらにこの鈕氏に続いて、慶応四年に召使いとあった呉徳順の名が記されている。

下等 呉徳順 五十八歳 無錫縣 八閩會所看守 安政四年四月四日 十善寺郷

とあり、呉徳順がおそらく鈕春杉の斡旋によってと思われるが、明治十一年当時において八閩會所の看守となって長崎に在留していたことが知られる。

鈕春杉は、先に蘇州とあったが右の戸籍簿から江蘇省蘇州府長洲縣の出身であったことが判る。長崎唐人貿易の中国側荷主が居住していたのも蘇州であり、彼の郷里でもあった。

鈕春杉の長崎来航から在留表（表1）

西暦	中国暦	日本暦	番船名	入 港 日	職 名
1845	道光25	弘化2	巳一番船	12月11日	財 副（34歳）
1846	道光26	弘化3	午三番船	6月14日	財 副
1847	道光27	弘化4	午七番船	1月21日	財 副
1850	道光30	嘉永3	戌三番船	12月21日	財 副
1852	咸豊2	嘉永5	子一番船	1月17日	脇 船 主
1852	咸豊2	嘉永5	子五番船	12月22日	脇 船 主
1856	咸豊6	安政3	辰一番船	1月16日	脇 船 主
1857	咸豊7	安政4	巳三番船	2月22日	脇 船 主
1859	咸豊9	安政6	未一番船	3月15日	脇 船 主（48歳）
1861	咸豊11	文久元	未二番船	8月8日給牌	船主・在館
1868	同治7	慶応4		在館唐人（一番）在住	57歳
1869	同治8	明治2		八閩会所総理	
1874	同治13	明治7		八閩会所総理	
1875	光緒元	明治8		八閩会所総理	
1878	光緒4	明治11		八閩会所董事	67歳

②唐船主程稼堂から長崎華商程稼堂

長崎唐船主から長崎華商になったことが明らかな人物がもう一人いる。それは程稼堂である。

程稼堂という名が、長崎貿易の信牌の給繳記録である『割符留帳』に見える最初は、安政五（咸豊八、一八五八）年七月二十九日の夜、長崎に入港した午一番船の在留船主としてであるから、彼はそれ以前に長崎に来航していたと考えられる。この後、程稼堂の名は、安政六（咸豊九、一八五九）年三月二十七日夕刻入津の未三番在留船主、そして、上述の文久元年八月二十九日入津の申一番船在留船主、同年十一月十三日入津の酉一番船在留船主というように三度知られる。

ところで、程稼堂は最初からこの名で長崎貿易に関係していたのではなかった。そのことは『幕末外国関係文書』十六の七四の安政四年「閏五月十七日、長崎在留唐船主願長崎奉行へ別段荷渡仕役猶予の件」（二九〇～二九二頁）の文書中の船主名には「巳乙番船主程稼堂、顧子英、巳式番船主顧子英、程稼堂」とあり、この文書より約二ヶ月前

程子延・程稼堂の長崎来航、長崎在留表 表2⁴³⁾

西曆	中国曆	日本曆	干支	長崎来航	
1844	道光24	弘化01	甲辰	辰1番船財副 (07.13)	辰4番船船主
1845	道光25	弘化02	乙巳	巳1番船船主 (07.11)	
1846	道光26	弘化03	丙午		
1847	道光27	弘化04	丁未	未1番船船主 (01.05)	未5番船船主 (11.26)
1848	道光28	嘉永01	戊申	申1番船在留船主 (07.26)	
1849	道光29	嘉永02	己酉	酉1番船在留船主 (01.23)	酉4番船在留船主 (06.27)
1850	道光30	嘉永03	庚戌		
1851	咸豊01	嘉永04	辛亥	辛3番船在留船主 (壬子01.01)	
1852	咸豊02	嘉永05	壬子		
1853	咸豊03	嘉永06	癸丑		
1854	咸豊04	安永01	甲寅	寅2番船財副 (07.27)	
1855	咸豊05	安永02	乙卯		
1856	咸豊06	安永03	丙辰		
1857	咸豊07	安永04	丁巳	巳1番船船主 (02.19)	巳2番船脇船主 (02.22)
1858	咸豊08	安永05	戊午	午1番船在留船主 (07.29)	
1859	咸豊09	安永06	己未	未3番船在留船主 (03.27)	
1860	咸豊10	萬延01	庚申	申1番船在留船主 (辛酉08.29)	
1861	咸豊11	文久01	辛酉	酉1番船在留船主 (11.13)	
1862	同治01	文久02	壬戌		
1863	同治02	文久03	癸亥		
1864	同治03	元治01	甲子		
1865	同治04	慶応01	乙丑		
1866	同治05	慶応02	丙寅		
1867	同治06	慶応03	丁卯	復興号設立 (01.21)	新地住居 (4月)
1868	同治07	明治01			新地住居 (4月)
1869	同治08	明治02			

の『幕末外国関係文書』十五の三二五の安政四年「四月長崎奉行達 磨船主へ代官町年寄等所望詔物禁止の件」(八六九〜八七〇頁)の船主名には「巳乙番船主程子廷^{マツ}、顧子英、巳式番船顧子英、程子廷^{マツ}」とあることから、程稼堂と程子延は同じ船の船主であり、かつ同姓でもあるので、同一人物であったと思われる。それ故、安政四年四月に来航した程子延が閏五月十七日までに船主名を改めたものと考えられる。

このように、程稼堂は、程子延名の時代の弘化元(道光二四、一八四四)年から文久元(咸豐十一、一八六一)年まで、数度の長崎在留をも含め彼の長崎来航は約一八年間に及んでいる。この間の程稼堂の来航を表示したのが表2である。

程稼堂がその家族の長崎在留を願ひ出た理由書の漢文は「清朝楔文之写」として残されている。これは程稼堂が提出した太平天国風説書の一部である。

茲為唐山賊匪擾乱、蘇城失陷、稼之妻子、避乱逃難、到此地。因将其情由、陳干左。

今夏四月初四日、南京逆匪圍困蘇城、縱火城外民屋、……王公兩局総以下于商夥家眷、各自瓦解萍散、未知流落何地、尚有各種茶毒情况。……再者同月十四日公局宏豊抵乍。為因該地土匪蜂起。殺害鎮官、搶劫人家。宏豊連貨駁開逃至寧波等云。王局吉利及吉隆兩舟、于今十五日到上海十里外吳淞口、只因上海各行掩上門戸、無人接貨、通船人衆、迄今窮泊吳淞、凡事如此、将来商情不可知也。且今上海之地、雖用銀兩、以佛蘭西防堵賊擾、或者批評云。朝廷以爵祿養官員、尚且不能臨難致命、以利相交之人安肯、興賊血戰以保守乎、殊非万全之計、誠恐節外生枝、更有甚焉者矣、危哉。特此具單用達尊聽伏冀、電鑑是禱。

公局在留船主程稼堂

とあり、これには年月日は記されていないが、この漢文を、長崎唐通事により和解されたと考えられるのが、長崎市

立博物館蔵の「十二家在留船主程稼堂願書」である。この和解の方が早くから知られていたのであるが、ここでその全文を記してみると、

此度唐国賊乱のため蘇州落城致し私妻子供難を避ケ、御当地ニ逃来候付、右之模様略左ニ申上候、

当夏四月四日南京之逆徒蘇州を取巻城外民家ニ火を附ケ逆焰を挙候処、……王氏十二家荷主始府方一統仲ケ間之家族共何れも瓦解萍散して行方不相分、此外茶毒を被り候情景閑ニモ不忍事計ニ而筆紙ニ難申尽候者、……猶又同月十四日十二家宏豊船乍浦江着船之处、同所土匪蜂起し鎮官を殺害し人家を搶劫致し候付、宏豊船ハ積荷之俣乗出し寧波江逃去候由、王氏吉利并吉隆船ハ同十五日上海拾里之外吳淞口ニ着船之处、上海諸問屋何れも門戸を閉、荷物引請候者も無之候付、一船之人数ニ今吳淞口ニ滯船致し居斯而ハ商賣方も此後如何成致可申哉、且上海之地ハ銀兩を以佛蘭西人江相頼ミ賊乱之防禦致させ候といへとも爵禄を以被養育候官吏さへ難ニ臨ミ命を惜む世態ニ候得ハ、利を以交る外国人共如何して賊ニ向ひ血戦して可相防哉、是又万金之計ニ無之、此上何等之事相起り候哉も難計、誠ニ以危き次第ニ有之様と評判致し候由ニ御座候、此段以書付奉達

尊徳御明鑑、被成下度奉願候、

申五月廿五日 十二家在留船主 程稼堂

とあり、この和解の日付は万延元（庚申、咸豊十、一八六〇）年五月二十五日付であり、先の漢字資料と内容はほとんど一致することから漢文資料にあった日付が写された際に、何らかの理由で欠落したものと思われる。

太平軍の進出により、蘇州一円は混乱状態に陥いつて、日清貿易の中国例の荷主である王氏・十二家荷主やその家族も離散し行方不明の状態にあった。それと同時に、貿易の中心地乍浦も混乱しており、乍浦が属す嘉興府は、蘇州落城後十三日で太平軍の進入を受けている。このような状態から、日清貿易をおこなうことが困難となり、程稼堂の

家族一同が長崎に渡来してきたのである。

しかし、程稼堂は既に長崎に在留中であつて、諸々の因難をかかえていた。その最大は貿易船をどうするかということである。彼は長崎に居るため、唐船の拠点である中国側と連絡を取することは困難であるし、日本の和船も海外渡航が許されていない状態である。そのような状況下ではあるが、眼前の長崎港には多くの外国船が入港している事実があることから、その利用を考えるのは当然と言えよう。

この後、程稼堂は長崎に在留し、中国人の輸出入業問屋「復興号」に關係している。「御用留」の中に慶応三年（一八六七、丁卯）正月二十一日付の「唐人開店届」があり、

昨年始而渡来仕候、私知音之程維賢と申者、此節において商賣仕度奉存候、付ては問屋号復興号と相唱へ、此後荷物輸出入之節は、同人より右名前を以御願申上候様仕度、此段以書付奉願候、

卯正月廿一日

総商 汪循南

和解 彭城 大次郎⁴³

とあり、慶応二年に長崎に渡来した程維賢が輸出入業の問屋復興号の開店届を出している。そして、長崎県立図書館蔵の慶応三年四月の「新地住居唐人名前帳」には復興号として「程維賢」の次に「程稼堂」の名が記されている。しかし、翌慶応四（明治元、改元は九月、一八六八）年四月の同図書館蔵の「新地住居唐人名前書」には「四十九番復興号」として、筆頭者に「程稼堂 五十八才」とあり、程維賢の名は見えないことから、慶応四年以降は程稼堂が事実上の復興号の経営主となったと思われる。

四 小結

江戸初期から長崎で行われた中国貿易のために来航した中国船の商人等の商業形態は、船舶の「船主」として呼称された。船主は船舶の積荷の全責任を担い、その売買を取り仕切った、船舶経営にとって最高責任者であった。船主の取引の差配によって、その利益の多寡が左右すると言う、荷主にとっても、船員にとっても重要な役であった。江戸時代の長崎貿易では、その船主は長崎に定住することなく、取引が終了すると来航した唐船で帰国するのが常であったが、幕末になると毎回帰国しないで、数年に渉り長崎の唐人屋敷即ち唐館に在留する者が見られたが、長崎でのその生活は不明な部分が多い。しかし、基本的には交易のために来航し、交易が終了すると帰国すると言う船舶による貿易形態であった。

その後、明治の開港を経て長崎のみならず神戸、大阪、横浜、函館等の貿易港を中心に華僑、華商と呼称された中国系商人が日本に滞在して商業活動に従事する。その先駆的な華商の中に江戸時代の長崎貿易に従事していた中国商人がいたことが先に述べた鈕春杉、程稼堂など確認できる。彼等が長崎在留の形態を望んだ最大の理由は、中国における政変による環境の変化であった。

【附記】

本稿は、二〇〇六年二月一六日に長崎歴史文化博物館で開催された関西大学アジア文化交流研究センター主催の第三回研究集会「長崎と日中文化交流」における報告に基づいている。

本稿は平成一八年度私立大学学術高度化推進事業学術フロンティア事業「東アジアにおける文化情報の発信と受容」（代表…関西大学アジア文化交流研究センター長・松浦章）の成果の一部である。

〔註〕

- (1) 内田直作『日本華僑社会の研究』同文館、一九四九年九月、三九二頁。
- (2) 『日本華僑社会の研究』三、四八頁。
- (3) 『日本華僑社会の研究』五一、一四二頁。
- (4) 『日本華僑社会の研究』一四五、三八〇頁。
- (5) 菱谷武平「長崎外人居留地に於ける華僑進出の経緯について」(『長崎大学社会科学論叢』第二号、一九六三年三月)や長田和之「幕末開港期長崎における華僑の流入型態をめぐって」(『洋学史研究』第五号、一九八八年四月)がこの問題に考察を加えているが、長崎唐人貿易との関係については殆ど触られていない。
- (6) 蒲池典子「明治初期の長崎華僑」『お茶の水史学』第二〇号、一九七七年二月、一、一九頁。
- (7) 陳東華「長崎居留地の中国人社会」。長崎県立長崎図書館 郷土史料叢書「四」、幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿Ⅲ、長崎県立長崎図書館、二〇〇五年三月、五一〇、四九二頁。
- (8) 斯波義信「華僑・華人」、可児弘明、斯波義信、游仲勲編『華僑・華人事典』、弘文堂、二〇〇二年六月、一〇五頁。
- (9) 斯波義信「華商」、可児弘明、斯波義信、游仲勲編『華僑・華人事典』、弘文堂、一四二頁。
- (10) 『華夷変態』財団法人東洋文庫、上冊、一九五八年三月、三〇九頁。
- (11) 『華夷変態』中冊(一九五八年三月)、1374頁。
- (12) 『華夷変態』上冊、七二一頁。
- (13) 『華夷変態』上冊、七七八頁。
- (14) 『華夷変態』上冊、七九八、七九九頁。
- (15) 『華夷変態』中冊、一二六八頁。
- (16) 『華夷変態』中冊、一二六八頁。
- (17) 『華夷変態』下冊(一九五九年三月)、二八三、二八三四頁。
- (18) 『宮中档雍正朝奏摺』第十一輯、国立故宫博物院、一九七八年九月、七一頁。
- (19) 『宮中档雍正朝奏摺』第十一輯、国立故宫博物院、七一、七二頁。

- (20) 『宮中档雍正朝奏摺』第十一輯、国立故宫博物院、七二頁。
- (21) 『宮中档雍正朝奏摺』第十一輯、国立故宫博物院、四一二頁。
- (22) 『史料旬刊』天八六四丁b、国風出版社、一九七七年六月、四六一頁。中国第一歴史檔案館編『清代中國與東南亞各國關係檔案史料匯編』第二冊(菲律賓卷)、國際文化出版公司、二〇〇四年一月、一五五—一五八頁。
- (23) 『葡萄牙東波塔檔案館藏 清代澳門中文檔案彙編』澳門基金、下冊、一九九九年一月、六二四頁。
- (24) 『清代中国與東南亞各國關係檔案史料匯編』第一冊、一九九八年四月、國際文化出版公司、一五〇頁。
- (25) 『清代中国與東南亞各國關係檔案史料匯編』第一冊、一五二頁。
- (26) 『李文忠公全集』一、文海出版社、一九六五年三月再版、六〇〇頁。
- (27) 太平天国歴史博物館編『呉煦檔案選編』第七輯、江蘇人民出版社、一九八三年九月、一一四頁。
- (28) 大庭脩編『唐船進港回棹録』島原本唐人風説書 割符留帳—近世日中交渉資料集—『關西大学東西学術研究所、一九七四年三月、二五八頁。
- (29) 松浦 章「ジャーディン・マセソン商会と日清貿易—文久元年申一番ランシフィールト船の来航をめぐる—」『海事史研究』第二五号、一九七五年一〇月。
- (30) 『続通信全覧・類輯之部』一三、雄松堂出版、一九八五年十一月、六六六—六六七頁。
- (31) 大庭脩編著『唐船進港回棹録』島原本唐人風説書 割符留帳—近世日中交渉資料集—『關西大学東西学術研究所、一九七四年三月、二五九頁。
- (32) 『唐船進港回棹録』島原本唐人風説書 割符留帳—近世日中交渉史料集—『二五五、二五六、二五七—二五八、二五九頁。
- (33) 『続通信全覧・類輯之部』一三、六六五—六六六頁。
- (34) 『夷匪入港録』一、東京大学出版会、一九三〇年三月初版、一九六七年八月覆版、二八六—二八七頁。
- (35) 長崎県立図書館所蔵、図書番号三一六—一四外—一七〇
- (36) 長崎県立図書館所蔵、図書番号三一六—一四外—二四九
- (37) 長崎県立図書館所蔵、図書番号三一六—一四外—三六三
- (38) 長崎県立図書館所蔵、図書番号三一六—一四—五八

- (39) 大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳―近世日中交渉史料集―』二四―一六頁。
- (40) 長崎県立図書館所蔵、図書番号三一六―一四外―一七〇
- (41) 長崎県立図書館所蔵、図書番号三一六―四三〇
- (42) 松浦章「ジャーディン・マセソン商会と日清貿易―文久元年申一番ランシフィールト船の来航をめぐって―」『海事史研究』第二五号、一九七五年一〇月、七〇頁。
- (43) 『長崎幕末史料大成』5 開国対策編Ⅲ』二三頁。